

愛の深さは

愛は生かし、愛は育て、愛は癒やすのである。

愛は身を捨てることだ。自己を殺し、自己を鞭撻^{むちう}ち、自己を無くするのだ——このような愛のみが、他^{ひと}を生かし、育て、癒やすことができるのである。

自分がかわいいようなことで、自分の子供のみがかわいいようなことで、他^{ひと}の子供は預かれるものではない。

ひとの教育を引き受けるかぎりはこれだけの決心がなければならぬ。

愛するがゆえに生かす人と、愛するがゆえにかえって愛に捉われて自由を失って殺す人とがある。

愛は甘いものではない。煩惱が甘いのだ。本当の愛は峻厳^{しゅんげん}なるものである。峻厳を失った時愛はただ相手を甘やかし、相手を墮落させる動機となるばかりである。

しかし、峻厳のみが愛ではない。愛のなくせに自分の冷淡さをごまかすために、自分の愛は「峻厳な愛」であるなどと言っている者は唾棄^{だき}すべき詐欺漢^{さぎかん}である。

愛とは自分を捨てることだ。自分を捨てているものは峻厳であり、同時に無我帰一^{むがきいつ}だ、自他一体^{じたいいつ}だ——それがすなわち愛だ。

愛の深さは外見の深切らしさの深さでは測られない、自分を捨てている程度が愛の深さである。

幸福の扉の開き方

二、真諦^{しんたい}と世諦^{せたい}

実相というのは仏教の方では第一義諦^{ぎたい}とか真諦^{しんたい}とか申します。そして病気が治り、無限供給が顕われ、治国平天下^{ちこくへいてんか}が現象界へ出てくるのを世諦^{せたい}と申します。世俗の生活の上に真理が現われてくるのを世諦^{せたい}が成就すると申すのであります。世間には真諦ばかり、真理ばかりが尊いので、世諦などは第二段のものだと輕蔑^{けいべつ}なさる方がありますが、それでいて毎朝御飯をおあがりになりますのは世諦の方でございます。世諦があたりまえにできるのは、心の鍵の形が実相の宝庫の鍵孔の形に一致しているからでございます。理屈では親をやり込めたつもりでも、親の恩を忘れてみたり、親に迷惑をかけてなんとも思わなかったり、収入がなくて支払いに困るようなのは、心の鍵が実相の鍵孔に合っていない証拠^{しやうこ}です。われわれ人間はすべて実相は神の子であり、無限富者^{ふうしや}なる神の後嗣者^{あとつぎ}として無限供給の宝庫を擁^{よう}しているのに、その宝庫をひらくことができないのはまだ一人前になっていない証拠^{しやうこ}です。それをいかに、この世の中へ導き出してくるかということが、世諦の成就であります。世諦の成就いかんは鍵の形の正不正を顕わしているのです。趙州和尚^{じょうしゅう}が「御飯をたべたら、茶碗を洗え」と言われたのはそこであります。教えの中で御飯をたべさせていたながら自分一人で御飯が食べられるようになったといつて、親の茶碗に砂を入れておくというやり方は感心しません。世諦の成就の方は仏教では「三界^{さんがい}は唯心^{ゆいしん}の所現^{しよげん}である」というような言葉で現わされております。『華嚴經^{げんぎやう}』の中には「心は工^{たく}みなる画師^{えし}のごとく、法として造ら

ざるはない。すべてのものは心がこれを描いて造るのである」と書いてあります。これは世諦であつて變化する現象界の方であります。これは仏教でありますが、すべての宗教には真諦と世諦と両方あるのでありまして、その真諦を握つた時に、世諦が自然に成就せられてくることになるのであります。「法爾として自然」という言葉がありますが、これは真諦（法）が、法さながらに自然に現象界に動き出してくる状態を形容する言葉であります。真諦と世諦とを二つにわけて考えるのがまちがいでありまして、真諦が悟れるから法爾自然に世諦が整うのであります。世諦の方を何か迷信であるとかあるいは現世利益であるとかいつて排斥するには及ばないのであります。世には、宗教において現世利益を排斥する人は多いのでありまけすれども、實際生活の上で人間が現世利益をみんな求めていふというのは事実なのであります。われわれは朝起きて顔を洗う——これは現世利益を実行しているのであります。やがて飯を食う。これも現世利益であります。排便をする、これも現世利益であります。毎日毎日われわれは現世利益を実行している。これは真理が現われて、顔を洗い、飯を食ひ、大便を放つていふのであります。皆大法の顕われであります。大法さながらの顕われであるから、これを法爾自然と申すのであります、大法現成です。柳が緑、花が紅であるのも大法現成です。そう申しますと、借金して返済できないとか、恩人の顔に泥を塗るとかするのは大法現成かと言う人があるかもしれませんが、これは大法現成ではありません。小法現成であります。大法から何かがマイナスされているのです。法爾の自然の現われではなくて、法が迷いに隠蔽さ

れて不完全に顕われているので、これではいけません。悟つた生活は、真諦と世諦とぴったり裏表にならなければいけないのであります。世諦がぴったり真諦と裏づけになってこの世の中に法さながらに実現しないような生活でありましたならば、それはどこかに真理を隠し、実相を蔽うている処があるのであります。水道の水は、無限水量の貯水池から、そこまでズツと来ているのですけれども、水の出方が足りないのは、コックの捻り方が足りないように、何かひねり方に不完全なところがあるにちがいないのであります。この無限水量のコックの捻り方を教えるのが生長の家であります。

第三章 無礙の大道

五

この実例でもわかりますように、われわれはどんな時でも失望してはいけないのであります。そのままそこがありがたいと、その場その場を生かす生き方——これが一番大事のことでありまして、常に「今」を生きているということが必要なであります。生長の家の生き方は「今」を生かす生活だと言われています。今ここに生命が植えつけられている。この地上に生命が植えつけられているということは何か意義のあることではなければならぬ。この地上のここではないと果たすことのできない使命があるために、今ここに生かされているのだと思つて、今あるがままをできるだけ百パーセント生きるといふこと、これが大切です。ひっくりかえつて躓いておろうと怪我しておろうとどうしておろうと、その時そのままではなければ得られないところの一番いいものが与えられてい

るということを知るのが無^む擬^げの大道を生きることでもあります。そうすると病氣も幸福であるし、災難も幸福である、どんな苦しみも、困難も、みんなその時でなければ得られないところのものがその時自分に得られているというのでありますから、そこにいっさいの呪いがなくなる。初めて天地一切のものと調和するということができるのであります。「これは嫌い」、「あれは嫌い」ということがなくなってしまうのです。これが嫌いであるとかあれが嫌いであるとかいうことがありません。そのまま、そのありがたいことがわからないと災難がやって来ると悲しまなければならぬ。あるいは病氣になるとやはり悲しまなければならぬ。あの人はわたしにこういう仕打ちをしたから憎いとか怨^{うら}めしいとか思ったりして、心が引つかかって苦しまなければならぬのです。そこで引つかからない道というのは、今の時今あることが一番いいのだと知ることでありまして、それには自分に「注文」というものがあつてはいけないのであります。「注文」を出すと、自分の注文以上のものが出てくると悲しくなる。われわれには常に自分の注文以上のものがすべてわれわれに与えられているのであります。われわれはこれから起こってくるいっさいのことをことごとく予想して注文するわけにはゆかないのであります。注文しないでも注文するよりも余計善いものをわれわれは常に与えられているということをまず知るのが、自由を得る知恵であります。そういうふうになりますと、すべてのもの、美しいものはもちろん、醜いものでも、人が嫌うようなものでも、いやらしいものでも、みんなそのままであ

りがたいということになることができるのであります。そのままにありがたいということになりましたら、不平も、不満足も、腹立ちも何もなくなってしまうして、ただただありがたいばかりである、苦しめられてもそこに本当にありがたいものがあるのだ、こんなにまでして、わたしを鍛えてくださるのである、ああありがたいと、こう思えることになるのであります。こうして天地一切のものと和解し仲よしになったら、本当に感謝の念が湧いてくるのです。世間普通の人はいいことを与えられた時には、「こんなにまでしていただくだ、ありがたい」こう思うのでありますけれども、生長の家の生き方はいいいことでも悪いことでも、「こんなにまでわれわれに体験を積ませていただくのだ、ああありがたい」とこう思わなければならぬのです。雨が降ってもありがたいし、天気でもありがたい。ところが天気なら天気ということばかり把^{つか}まえておりましたら、雨が降る時にはうるさい、うっとうしいというような小言^{かんばつ}が出てくるのであります。ところがまた百姓さんが干^{かん}魘^{ばつ}の時に、雨が欲しい欲しい、こう思つて雨が欲しいということばかり把^{つか}まえておりましたら、せっかくないい天気でみんながうらかな天気だと思つて喜んでゐる時に自分だけは悲しまなければならぬのであります。形の世界では、同時に二つのことはできないことが多いのです。雨が降つて太陽が美しく輝いて道が乾いているということはできませんから、人間はなんでもこういう形がほしいと一つの形を把^{つか}まえたならもう駄目です。把^{つか}まえたならもう自由ではなくなり苦しくなるのです。何も把^{つか}まないで手放しになつてしまつて、引っかかりをみんな外してゆく生活になります

時、本当に自由自在な幸福の生活というものを送ることができるのである。

生命の實相 日本教分社 谷口雅春